

一八六二年における日本使節団のペテルブルク来訪について

アレクサンドル・ソコロフ

一八六二年にサンクト・ペテルブルクを来訪した日本使節団について⁽¹⁾RGIAが有する情報は、十二の文書案件を数え、ロシアと日本の関係を研究するための、きわめて興味深く、また重要な史料である。案件の多くは、使節団の応接、使節団がサンクト・ペテルブルクに入るときの儀式の編成、冬宮における使節団謁見のための準備に関するものである。多くの案件は、全権使節団の受け入れ、その周遊、使節や日本の天皇のための贈物の購入、出費細目などに関するさまざまな財政的な処置にかかわっている。

日本の使節団がロシアを訪問しようとしていることは、一八六二年一月に、駐ロンドンロシア公使より外務次官に宛てた書簡から明らかになる。そこには、当該使節のロンドン到着に関連して、イギリスにおいて始まった準備について語られている。ここでは、その後使節団がベルリン、サンクト・ペテルブルク、パリに向かう予定であると予想されている。この時（一月末から三月十五日まで）は、一八六二年使節団はまだエジプトに留まっていた。英国軍蒸気船⁽²⁾に乗ってスエズに着いた日本人は、スエズ総督に迎えられ、カイロまで特命のエジプト官吏に随伴された。ここに使節団は四日逗留し、英国および仏国領事の訪問を受けている。

使節団の構成員は、もっと早くから分かっていた。併せて、三十六名が来るようになっていて、二十四名の公式団員（下に示す）と十四名の召使である。ただし、文書の多くは、ベルリンのオステン・サーケン男

爵から送られた全権使節団の不完全なリストをフランス語で示し、そこには二十二名の名が挙がっている。それらの日本人の姓名については、さまざまなリストの中でしばしば混同があり、不正確かつ異同が多い。ただ一つフランス語で印刷された、もっとも正確と見なしうるリストがある。正確と言える理由は、第一に、これはすでに使節団が去った後にまとめられたもので、第二には、基本的に、使節の名と職名が冬宮における使節団謁見時の記録に現れるものと一致しているからである。かくして、このリストに拠ると、サンクト・ペテルブルクに到着したのは次の面々であったに違いない。

1. 正使：竹内下野守 (Takeno-Ouzy Simozkeno-Kami)
2. 副使二名：京極能登守 (Ken-goku Notono-Kami)⁽⁴⁾ 松平石見守 (Matsu-daira Ywanino-Kami)⁽⁵⁾
3. 監督官：柴田貞太郎 (Si-bata Sada-taro)⁽⁶⁾
4. 書記官：森山多吉郎 (Mori-yama Takisiro)⁽⁶⁾
5. 副監督官：福田作太郎 (Fakuda Saku-taro)⁽⁷⁾
6. 一等士官：岡崎藤左衛門 (Okasaki Tō-sayenom)⁽⁸⁾、水晶葉太郎 (Midsusina Raku-taro)⁽⁹⁾、日高圭三郎 (Hidaka Kei-Sabu-rō)⁽⁹⁾、淵邊徳藏 (Futsi-no-be Tōkuso)⁽¹¹⁾
7. 二等士官：山田八郎 (Yamada Hatsirō)⁽¹²⁾、高松彦三郎 (Takomatsu Hiko-Sāburō)⁽¹³⁾、齊藤大之進 (Saito Daimosin)⁽¹⁴⁾、森鉢太郎 (Mori Hatsu-Tarō)⁽¹⁵⁾、上田友助 (Uyeda Yuske)⁽¹⁶⁾、益頭駿次郎 (Masidusu Sun-Disirō)⁽¹⁷⁾

8. 医師 (それぞれ一等官と二等官) : 高島祐啓 (Takasima Yu-kei)⁽¹⁸⁾
川崎道民 (Kawasaki Dô-min)⁽¹⁹⁾
9. 通訳官 : 太田源三郎 (Ohoda Gen-S'aburô)⁽²⁰⁾ 福澤諭吉 (Fukusawa Jukitsi)⁽²¹⁾ 立廣作 (Tatsi-ko Saku)⁽²¹⁾ 福地源一郎 (Fukudsi Gen-itsi-rô)⁽²²⁾
10. 書記 : 箕作秋坪 (Mitsukuri Scu-hei)⁽²¹⁾ 松木弘安 (Matsuki Ko-an)⁽²²⁾

使節団の来訪に向けて、最大限に細心な方法によりただちに準備が始められた。直接この仕事に従事したのは、宮内大臣アドレルベルク伯爵であり、すぐさま宮廷財務長官シュヴァロフ伯爵と連絡を取り、類似の場合に、ロシアではどのような規定が有効であるのかを検討した。最初に問題となったのは、日本の全権使節団をどこに収容するかということであった。皇帝の希望に従い、彼らが夏に訪れれば、エラーギン島宮殿に、もしも秋に来るならば、「予備宮殿」⁽²³⁾に彼らを泊めることになっていった。

しかし、これらの宮殿が唯一の選択肢だったのではなく、シュヴァロフ伯爵は、ヨーロッパの例にならない、旅館を借り上げることをも提議した。それは、日本人たちが「自分の国の生活様式と習慣にしたがって、皇帝陛下の宮殿において要求される清潔さを以て過ごす」⁽²⁴⁾ことが期待できないと見なしたからであった。結果として、当時のロシアにとって使節を旅館に迎えることは、実行不可能な条件だったことが明らかになった。公爵が集めた情報の内で、多少とも条件を満たしているのは、ただ三つの旅館であった。すなわち、ミハイロフスカヤ通りのクレヤ Kleia、大カニューシェナヤ通りのデムト Demut⁽²⁴⁾、鉄道駅に向かいにあるズナメンスカヤ通りの旅館であった。最初のクレヤの所有者は、十分な空き部屋がないことを申し述べ、二番目は、きわめて高額の手料を要求し、三番目は適当な料金を申し出たものの、照明代と高価な物品の予想され

得る損害についての法外な料金を要求したのだった。それ以外に、ロシアの旅館は、ヨーロッパのそれとは、芳しくない意味で異なっており、有益ならざる印象を与える恐れがあった。このため、結果としては、使節団の宿泊地として、「予備宮殿」が選ばれたが、そこからは、街へ行くにも、また名所旧跡を見るにも便がより良いという理由もあった。この宿泊地では、直ちに修繕が開始された。とりわけ、大工仕事と壁紙の張替えを行い、他の場所からさまざまな入用のものを運び込んだ。たとえば、エラーギン島宮殿からは時計十個を運び、時刻を合わせ、部屋ごとに掛けたのであった。「予備宮殿」と宮殿の向かいにある棧橋に停泊する船にしかるべく掲げるために、大小の日本国旗が作成された。

当然の事ながら、各部屋については、日本人の習慣と好みに最大限沿うように調度をしつらえるよう努力がなされた。当時のロシアにおいて、これらの習慣についてどのくらいの知識があったのかを、日本における外国使節の応接にかんする覚書から、我々は知ることができる。それは、ロシア外務省の日本人官吏ヤマトフ⁽²⁵⁾が作成したものだ。

この覚書によれば、使節団の使者四名のための宿舎は、二十五部屋で構成されていなければならなかった。そのうち五部屋の床はマットレスと絨毯敷きでなくてはならず、これらの部屋の壁には、武器のために釘を打ち込むか、掛ける所がなくてはならず、また木製の風呂をしつらえなければならぬ。茶器、手水鉢、特別な暖炉、⁽²⁶⁾ 鑄鉄鍋、木製腰掛け、文机、腰掛け、桶、特別の大きな一平方アルシンの⁽²⁶⁾ 深さのある枕が幾つ必要なのか詳細に記されている。この文書から我々が知ることができるように、これらの品々はみな日本人に供与され、しかもかなりの数に上った(ただし、腰掛けについては何も記されていない)。

当初定められたことだが、使節団の団員は、食料および必要となる細々とした物品を宮廷から受け取るようになっており、さらに余計な出費を

避けるために、財務長官付きの特任宮廷官がこれを統制することになっていた。文書史料のなかには、日本人が好んだ品や食事のリストがあり、なかなか興味深いのでここに示しておこう。

『幾本かのサーベルを一緒に掛けるためのハンガー』三。個別に掛けるためのハンガー』一〇。槍架』二。手拭い掛け』六。木の机・胡桃の木』五／普通の木』四五。円筒形のクツション・綿打ちでビロード掛けのもの』五／更紗掛け』四五。麻布でできた手拭い・上質のもの』五〇／普通のもの』五〇（手拭いはそれぞれ五〇／四アルシンの長さがなければならぬ。このような手拭いを一〇〇揃いこしらえるためには一二五アルシンの麻布が要る）。糠のための袋』三六（体を洗うときに、日本人は石けんの代わりに小さな袋につめた小麦の糠を用いる）。米を始めとする日本食全般に必要な様々な深さの陶器の食器・上質のもの』二ダース／中等のもの』三ダース／並』六ダース。鍋・米を炊くための鉄鍋もしくは銅製の一ヴェドロ²⁷の容量を持つもの』一／木製のふた』二。底に穴の空いた特別なブリキ缶』二。このブリキ缶は米を蒸かすためのもので、一方がもう一方に入るという二組から成り、さらにブリキのふたがあるものである。タバコの灰を叩いて出すための灰皿』一六。特に足りないということがなければ、灰皿には火打ち石が必要になるかも知れない。ニス塗りのブリキの中盆』八―一〇。そこには葉巻タバコ、マッチ、煙草を置くのである。トルコ製の軽い煙草と重い煙草、同様の葉巻、巻きタバコ。葉巻タバコのための紙製かブリキ製の箱』八―一〇。文房具・紙、さまざまな封筒、封蝋、ペン（鷲ペンと銅ペン）、鉛筆、インク壺、墨。これらの品々はみな、使節団の主要人物の部屋、当直のための日本人官吏の部屋、士官のための部屋にある。

食事に必要な食材の中では、日本人は、様々な種類の魚、特にサケ

とコイ（サザン）、鳥、鴨、卵、米、酸漬けキャベツ、ビクルス、塩漬けおよび生の大根、キュウリ、マカロニ、バーミセリを好んだ。²⁸

調味料としては、（日本の）醤油、酢、胡椒、芥子、山葵、玉葱、長葱を好んだ。

ワイン・赤ワイン、シェリー酒、シャンパン、マラミンやその他の酒

果実・蜜柑、葡萄、干無花果、林檎

茶については、日本人はおもに黄色いまたは緑の茶を飲む²⁹』

儀典局では、宮廷における日本使節団の到着および歓迎謁見のための儀式が編成されはじめた。この時、多くについて指針となったのは、上述のヤマトフの覚書であり、テキストの大部分をここで示さないわけにはいかないだろう。

『日本における外国使節団の応接

1. 外国使節が日本の最初の都市に到着した翌日、都市の君主（公）は官員を派遣し、無事の到着を使節に対して祝い、客館と必要な物全での準備が整っていることを報告する。
2. このとき、使節が首府にいつ到着するのが望ましいのかを確認する。
3. 使節が指定した首府到着の日、通例（最初の都市についてから）三日後に、官員が派遣され、使節に割り当てられた客館まで同道する。
4. 使節に向けて通訳官が派遣され、使節の求めにしたがって食料と必要な物資を購入する。
5. 数日後使節は第一大臣を訪問し、皇帝陛下²⁹への謁見を請う。
6. 大臣は、官員を通じて、使節に皇帝によって指定された謁見のための日時を告げる
7. 宮殿へは儀杖護衛隊が使節に同道し、群衆が道に入ってこないよ

うにする。そうでなければ、使節は侮辱を受けたと思うかも知れないからである。

8・ 宮殿の廷内では、儀典長が使節を迎え、広間へといざなう

9・ 使節と皇帝との会話の内容は、事前に通訳官が大臣に伝える。皇帝からの返答もまた大臣を経由して通訳官に伝える

10・ 皇帝は、すべての随員とともに使節を招く。通常カーテンで覆われているため、外国使節がこの時皇帝の尊顔を拝すことはない。

11・ 会話が終了するとすぐに、使節は次の間に下がり、茶と菓子が振る舞われる

12・ もしも使節に自分の宮廷から皇帝への贈答品がある場合は、これらの品は皇帝への謁見の日の朝に宮殿に送られる。品は第一大臣が受領する。

13・ 皇帝との会見のあと、外国使節は同日、儀杖護衛隊に連れられて、ただ近親の皇子たちのみを表敬訪問する。

14・ (よくあることだが) 皇帝が使節を昼食に招いた場合には、このことについて前もって正式に通告しておく。ただし皇帝自身は食事をとらず、ただ大臣たちと御側の者たちが食事をする。

15・ 外国使節は、皇帝から使節団の任務にかかわる最終的な回答があるまではどこにも出ない。このとき皇帝は、使節の君主のために、使節に対して贈物をわたす。

16・ その後、使節には都市の名所が示され、その時には官吏数名が同道し、通訳官を通じて説明する。

17・ 最後に、皇帝は使節に対して告別の日を定め、このとき使節は最初の会見と同様に、皇帝の尊顔を拝すことはない。またこのときは、皇帝はたいはい戴冠していない。皇帝の名において個人的に使節に贈物が贈られる。この後、使節は近親の皇子たちとのみ告別し、やっと

首府を後にするのである。

附記・使節の宿舎はつねに監視下になくはならない^(iv)

儀式を編成するにあたり、東洋からの他の外国使節の応接の経験も勘案された。それは一八五五年十二月にペテルブルクを来訪したペルシャの全権大使の例であった。以下にその大使の謁見時についての案件からの抜書きを示そう。

『謁見の準備がすべて整い、皇帝陛下の御命令が受諾されると、儀典長は使節を外務省の通訳官とともに招じ入れ、外務次官の三等文官セニャーヴィンが謁見の間に入った。それは黄金の客間であり、ここで使節は皇帝陛下に迎えらるる幸福を得て、陛下に信任状を捧呈したのである。』

皇后陛下は皇太子殿下とともに、使節接遇のために黄金の客間にお出ましになり、使節は宮内大臣によって、外務省の通訳官とともに、前述の客間にいらつしやる陛下のもとへと誘われた。そこには謁見に際して次の人々が揃った。内侍サルトウコヴァ公爵夫人、女官のドルゴルコヴァ公爵夫人およびチュチェヴァ公爵夫人、宮内大臣アドレルベルク伯爵、宮廷財務長官シュヴァロフ伯爵、宮廷人事長官オルスフィエフ、儀典長ボルフ伯爵、外務次官セニャーヴィンであった。』

当初は、使節団がどのように(陸路か海路か)到着するか、またどの宮殿で謁見式を執り行かかが明らかでなかったため、日本全権の応接について儀式の草案が幾通りか考えられた。それらはツァールスコエ・セロー⁽³⁰⁾、ペテルゴフ⁽³¹⁾、そして言うまでも無く冬宮⁽³²⁾におけるものだった。当初、日本人は鉄路でやってくるものと考えられていた。彼らを特別列車でツァールスコエ・セローへ招待し、駅では宮廷官が出迎え、その後の短い休息の後、謁見のために宮殿へ案内し、その終わりには、公園を四輪輓馬車と四輪無蓋馬車で周って使節団を楽しませることになっていた。

ちなみに、まったく同じことがペテルゴフの場合も計画されていた。しかし最終的に謁見の場選ばれたのは、結局、冬宮であった。

日本使節団の皇帝への謁見式の最終案は諸紙に掲載された。我々の文書のなかには『サンクト・ペテルブルク新聞 *Journal de St. Petersburg*』の一八六二年七月二十六日号があり、これについて第一面が割かれている。^(v)

一八六二年七月二十八日、日本使節団はクロンシュタットに到着した。そこから蒸気船「ストレリナ」号でサンクト・ペテルブルクに向かい、英国河岸に着き、ここで歓迎式が催されたのであった。宮廷式部官にして四等文官のシェレメテフが、日本使節団の先導を命じられ、彼らがクロンシュタットに到着する日、使節団員を迎えるために宮廷の汽船でクロンシュタットの停泊地へと向かった。その際、自分の補佐官と日本使節団附きを命じられたアジア局官員とを伴い、使節とともにサンクト・ペテルブルクへと進んでいた。

使節とその随員のための、従僕が付き添うばね付四輪箱馬車、使節団の従者のための四輪乗用馬車と荷を運ぶための有蓋荷馬車があらかじめ棧橋に到着していた。ここには歩兵中隊一隊が敬意を払うために旗と軍楽つきで配備され、騎兵中隊と憲兵部隊が同道するために置かれていた。使節団を迎えたのは、指令を受けた警察本署長、練兵少佐、軍務総督の副官、外務省官員と海軍関係官庁官員であった。使節と随員は馬車に乗り、馬車の列は次の順で出発した。

1. 伝令将校を従えた警察署長が騎馬で
2. 副官および伝令将校を従えた警察本署長および練兵少佐が騎馬で
3. 士官と騎兵小隊
4. 四頭立て四座の馬車が六台。その中には式部補佐官「アバザおよびゴルブツォフ、アジア局官員ヤマトフ、日本使節団下級医師「川崎道民、

日本使節団の書記二名「箕作秋坪および松木弘安、通訳官二名「太田源三郎および福澤諭吉、通訳官二名「立廣作および福地源一郎、下級士官「山田八郎・高松彦三郎・齊藤大之進・森鉢太郎・上田友助・益頭駿次郎、上級医師「高島祐啓、上級将校「岡崎藤左衛門・道綱楽太郎・福田作太郎・日高圭三郎、監察官「柴田貞太郎、アジア局官員二名「七等文官エッセンおよび五等文官タタリノフが乗車した。

5. 士官と騎兵小隊

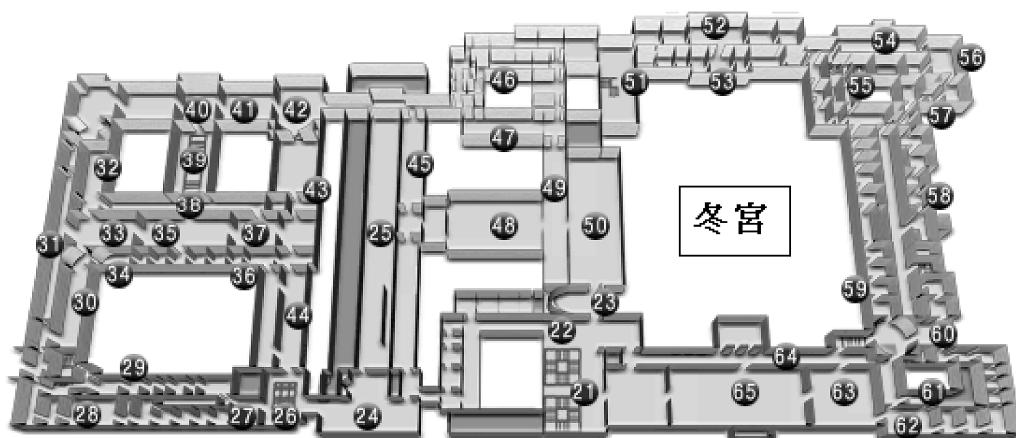
6. 四頭立て四座の馬車が二台。ここには副使二名「京極能登守および松平石見守、儀典局長の四等文官クドウリヤフツエフ、日本使節団正使竹内下野守、その向かいには先導役の式部官シェレメテフが座った。馬車の近くには騎兵中隊の司令が、また脇には宮廷馬丁と馬屋主任将校二名が騎馬で附いていた。

7. 士官と騎兵小隊二隊が車列の殿となった。

車列は蒸気船の波止場から英国河岸を通り、イサク広場、海軍省前広場を通り、冬宮のそばを過ぎ、宮殿河岸沿いに予備宮殿へと進んだ。その周辺には、到着の日、使節団に敬意を表するために歩兵中隊一隊から儀杖兵が旗と軍楽とともに配備された。その後、入口には、使節がサンクト・ペテルブルクに滞在中は、二名の歩哨が常に附くよう命じられていた。

到着後四日経った七月三十一日の正午、冬宮内の大公女オリガ・ニコラエヴナの部屋で、宮内大臣アドレルベルク伯爵が使節団員を応接した。彼らはネヴァ河側から「小玄関」に到着し、茶の席で大臣に引き合わされ、その後副宰相との面会に赴いた。⁽³³⁾

八月二日木曜日、十二―十三時の間に宮廷からの通達にしたがって、冬宮における使節団歓迎の謁見に際して、女性と男性のパートナーたちや「その他の男女が廷内に到着し、」集まった。また將軍、参謀、近衛



↓ ネヴァ河へ 二階

21：正面階段	48：聖ゲオルギーの間	50：紋章の間	51：アレクサンドルの間
56：黄金の客間	63：コンサート・ホールの間	65：ニコライの間	

(http://www.hermitagemuseum.org/html_Ru/08/hm88_0_1.html)

尉官らしかりであった。女性はロシア式装束で、男性は正装し、アレクサンドルの間に集まった。その後、陛下のお出ましまでに予め聖ゲオルギーの（玉座の）間へ移しておくのであった。

このときまでに日本使節団は予備宮殿から、式部官とその補佐官らの招請により、金色に塗った行列用馬車で出発し、その後ろには礼装をした宮廷従僕が付いた。使節団は宮殿河岸を通り、冬宮のそばを過ぎ、廷内に向かう「大使」口へと、次の順序（式次第）で向かったのである。

「四頭立て四座の馬車。そこに二名の式部補佐官と二名のアジア局通訳官が乗る。

四頭立て四座の馬車。そこに日本使節団員二名、高松彦三郎および森鉢太郎が乗る。

四頭立て四座の馬車。そこに日本使節団員二名、道綱楽太郎および上田友助が乗る。

四頭立て四座の馬車。そこには、財政顧問日高圭三郎と監察次席福田作太郎が乗る。

四頭立て四座の馬車。そこには、書記官森山太吉郎と随員長柴田貞太郎が乗る。

六頭立て四座の馬車。そこには、副使松平石見守および京極能登守、儀典局長タドリヤツエフが乗る。馬車の扉には馬屋主任将校が騎馬で附くことになっている。

六頭立て四座の馬車。そこには、まず上座を正使竹内下野守が占め、その向かいに先導役の式部官シェレメテフが座る。馬車の扉には馬屋主任将校が騎馬で付くことになっている。

騎乗砲兵四名が騎馬で」

宮廷の廷内に入るとき、中央衛兵所の歩哨は彼らに敬礼を行った。

「大使」口では次の人々が堵列した。階下では狙撃兵が、廊下と階段に

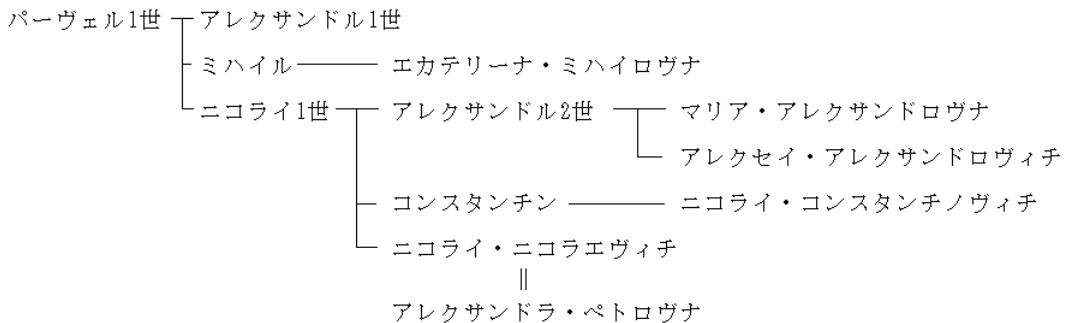
は従僕が、中の踊り場では宮廷従僕が、上の踊り場では正装した給仕たちが並んだのである。使節らが馬車を降りるとき、彼らは先触れ二名と宮廷八等官二名に迎えられ、正面玄関の階段を昇り始めた。上の踊り場では、宮廷六等官二名および下級侍従ゴルプツォフに迎えられた。

行列は、控えの間へと続き、そこでは使節団は禁衛歩兵中隊の敬礼を受けた。ニコライの間においては、日本人は式部官チエリシエフ、アジア局長、宮廷財務官、宮廷人事官ステンボク伯爵に迎えられた。相互に挨拶を交わした後、使節団は準備の整った二つの円卓へ饗応のため案内された。一つの卓には食器が十二揃い用意され、暗赤色のビロードの張られた長椅子とその脇に十二脚の椅子が置かれた。卓は金の装飾の施されたビロードの卓布で覆われていた。二番目の卓には八人が座るよう準備された。茶、菓子、青果、干し果物、焼き菓子やその他の甘味が供された。

饗応の後、使節団は、休息を取ったり着替えたりできるように、コンサート・ホールの間に通された。ここには使節とその顧問官のために四つの長椅子と四つの鏡が置かれ、お互いが衝立て区切られ、角には士官のために衝立と椅子が置かれた。

ちょうど十三時に皇帝の命に従って、使節団員は聖ゲオルギーの間に進んだ。先触れ二名、宮廷八等官二名、宮廷六等官二名、下級侍従、式部官とその補佐官が彼らに先行した。日本使節団の書記官が信任状を収めた書翰箱を掲げて、その後に続いた。

日本使節団の移動のときに、皇帝、皇后、およびアレクセイ・アレクサンドロヴィチ、マリア・アレクサンドロヴナ、ニコライ・コンスタンチノヴィチ、ニコライ・ニコラエヴィチ、アレクサンドラ・ペトロヴナ、エカテリーナ・ミハイロヴナらの大公たちは内廷の居室から聖ゲオルギーの間に進んでいた。玉座の前の下段には、左側に皇帝、右側に皇后が座



を占めた。それに応じて、左側には、大公たち、続いて宮内大臣アドレルベルク伯爵、副宰相ゴルチャコフ公爵、陸軍大臣、大本営参謀、外務次官、アジア局長、当直侍従武官長、侍従武官少将、侍従武官が位置した。右側には、内侍、宮廷侍女、宮廷人事女官、市の当直侍女、宮廷の上級官 $\equiv$ 宮廷財務長官シユヴァロフ伯爵および宮廷人事長官ウィエリゴルスキー伯爵、当直官 $\equiv$ 上級侍従コルフ男爵、下級侍従ストロガノフ伯爵、近従たちが位置した。部屋の中ほどには、禁衛歩兵の中隊が配備され堵列した。その後ろには、左側の円柱の前に、国家評議会の議員たち、宮内官、元老院議員、皇帝侍従武官団、近衛部隊將軍、佐官、尉官が位置し、右側には、市の女官たち、宮廷官、上級および下級侍従、その他の文官たち、近衛部隊の佐官と尉官が位置に就いた。

聖ゲオルギーの間に入るとき、日本使節団は両陛下と大公らに頭を下げて挨拶し、部屋の中ほどまで来ると再度自分たちの挨拶を繰り返した。その後、式部官と使節の先導者が、皇帝への謁見のために玉座に近づくよう二名の使節と監察官に求めた。その他の団員は部屋の中ほど

に留まった。正使は（自分の言語で）皇族方の御前にて日本の皇帝から⁽³⁴⁾の信任状を読み上げ、それを通訳官がオランダ語にし、その後、外務省官員がロシア語にするのである。

信任状の内容は次のようなものであった。⁽³⁵⁾「皇帝陛下。大君陛下の命を遂行して、我々は本日皇帝陛下に拝謁する名譽を授かりました。条約締結以来、両国の関係はますます発展しています。その結果として、大君は、親書を届けることを通じて、その誠実の情を証明し、条約に記されている信頼を復することを我々に命じました。この機会に、我々は、陛下の平穩と陛下の臣民の幸福と繁栄を願うものであります⁽³⁶⁾」。皇帝の命にしたがって、この信任状は副宰相ゴルチャコフ公爵が頂戴し、彼が（ロシア語で）日本皇帝への答辭を読み上げたのである。その内容は次の通りであった。「格別なる満足を以つて、大君陛下の代理人に挨拶する。ロシアと日本の関係はつねに友好的なものであった。両帝国が隣り合うこと、そしてそこから派生する共通の関心は、現存する関係が継続し強化されることの保証となる。朕は、使節派遣により示された大君の友好と、汝らの助けにより表された大君陛下の友誼の情とを重んじる。願わくは、我が首府における汝等の滞在が、ロシアから日本への無上の好意の内に汝らをも満足せしめんことを⁽³⁷⁾」。

その後、外務省官員がこの答辭をオランダ語で読み上げ、正使はこれを拝受し、通訳官が日本語に訳したのである。

信任状の交換ののち、日本の使節は隨員を兩陛下に披露し、その後、振り向くことなく玉座から遠ざかりつつ皇族方に自分たちのやり方でお辭儀をし、部屋の扉の所で挨拶をし、紋章の間へと下がった。使節団はここに留まり、正使は副宰相ゴルチャコフ公爵と会談を行った。その後、謁見にいたるまでと同様の作法に従って、使節はコンサート・ホールの間に進み、再び召物を替え、ニコライの間に戻り、同じ卓に招じられ、

再度茶と様々な果物、甘味を振る舞われた。使節団への饗応の際は、宮廷財務長官が臨席し、彼等と会話を共にした。謁見が終わり、十三時半になると、使節団は「大使」口に案内され、祝典用の馬車に乗って日本人一行は予備宮殿に戻ったのであった。⁽³⁸⁾

翌八月三日、十四時に日本使節団は「ヨルダン川」口に到着し、ここから宮殿の各部屋へと「見学のために」進んだ。彼等はエルミタージュのパビリオンと国家評議会の建物を訪れた。

同日、おもな使節団員と監察官は宮廷財務長官を訪問したが、彼の不⁽³⁶⁾在のために応接を受けなかった（この日、長官は皇后をクラスノエ・セローに送って行ったのだった）。

日本人は日本の国家評議会⁽³⁷⁾からロシア皇帝への贈物を詰めた十四の箱を運んでいたが、文書中からは明らかではないとある理由によってロンドンの税関に留め置かれていた。これらの品をサンクト・ペテルブルクに運んだのは日本人でなく、ロンドンのロシア公使館員自身であったことを記しておくのもなかなか興味深いことであろう。箱の中身については、ごくわずかのことしか分からない。日本からの贈物の中に、絹のモールと総の付いた錦の幕があり、それが冬宮に配されたことが記されている文書史料がただ一件有るのみである。

ロシア側も、使節団員および日本皇帝と議会への贈物の準備には苦勞した。この問題については多くの文書があり、それらから、贈物は入念かつ誠実に選び出されたことが分かる。それは、最大限はつきりと我国の文化的、産業的、科学的発展の成果を示し、かつロシアの国民の形質および国民性の特質を露わにし、ロシア帝国の領域についての明確な理解を与えるためであった。かくして、日本人には糸が贈られ、特に皇帝に宛てては、二塊の金欄銀欄、二塊の金銀錦、二反の青および深紅のピロードが贈られた。糸は使節団員にも割り当てられていた。しかし、こ

これらのすべてが国産ではなかった（ただ金襴と錦と毛糸のみであった）。というのも、相応しい質のビロードと絹は、当時は外国産のみであったからである。帝室磁器工場およびガラス工場の製品は花瓶、卓時計、食器、水差し、グラス、枝付き燭台、鏡などが贈られた。陸海軍省からはたくさんさんの地図、地図帳、都市図が、陸地（ロシアとカフカスの地図、陸水路図、ロシアとカフカスの電信線図、サンクト・ペテルブルクおよびモスクワおよび北京の都市図）のみならず海上のもの（バルト海、ラツブランド海、⁽³⁸⁾白海、黒海、カスピ海）も日本皇帝に贈られた。測量機器（平板、アストロラーベ、測角器、製図用具一式、Brunnerの羅針盤、歩数計）を贈り、加えて、機器の使用法について客人に説明する必要がある場合には備えて、地形測量技師の一団を派遣するよう事前に命じていた。同様に、航海器具も贈られた。航海用羅針盤、大方位コンパス、搭載ポート用の羅針盤、海上気圧計、土壌をすくえるような深皿付き測鉛、水準器であった。これらの器具のうちの幾つかは、一八六二年のロンドン万国博覧会においてメダルを受賞したものだだった。

日本皇帝へは、二本のサーベル、一万個の雷管を付した銃二丁、双甲板船の模型、地図、軍艦の模型、すなわち砲艦「ニコライ一世皇帝」号、コルベット船「ワリヤーク」号、「ヴィーテャジ」号、「アスコルド」号、クリッパー船の「金剛 *Almaz*」号と「真珠 *Zhenchug*」号の模型もまた贈呈された。

おそらく、日本人には、さらにロシア民族の形質とロシアの軍備を示すような小彫像が贈られたと思われる。これは芸術院会員コフシエンコフの彫刻作品であり、かつてのクリミア戦争の場面をモチーフにしていた。作品の選択は皇帝に任されていたが、作品のリストは、我々の文書史料の一つを成している。作品の一部には、向かい合わせに注記が施してある（これは「バム・カドゥク・ラル *Bam Kadyk Lar*」におけるロ

シア兵の功績」の作品群、「アンドロニコフ下士官の功績」の作品群、「皇帝御家族の狙撃兵連隊の兵卒」。しかし、我々はこれらが本当に贈られたのかどうかを知ることができない。というのも、それらについては、会計報告書が無い、というよりはむしろ存在し得ないからである。つまり、コフシエンコフはそれらを完全に無償で提供したのであった。

使節団員はそれぞれ、何かしらの記念品を拝領した。使節と随員長には黄玉製の印判、書記官には孔雀石のインク壺、士官にはガラスの水差しであった。贈物は、御つきの者たちにさえもそれぞれ一反の更紗とモロッコ皮二枚が送られ、それだけで総額七六三ルーブルに達した。

サンクト・ペテルブルクにおける滞在期間中、日本全權使節団はロシアの首都および郊外のような名所を参観した。このために、三台の馬車と四人掛け四輪幌馬車が供された。日本使節団の周遊のために三九一四ルーブルが費やされた。

当初、冬宮、エルミタージュ、科学アカデミー博物館、公共図書館、⁽³⁹⁾鉱山学校博物館、陸軍病院すなわちマリインスキー病院、医科外科学学校の治療室、美術大学、造兵廠とその機械工場、工科学校、クロンシュタットとその機械工場、プルコヴォ観測所、「（蒸気機関の）コルピノ工場、⁽⁴⁰⁾ペテルゴフ、ツァールスコエ・セロー、クラスノエ・セロー、ガツチナ、植物園、工兵学校、海軍兵学校、セストロエツキー武器工場、交通学校、プレオブラジェンスキー連隊第一中隊兵舎を日本人に見せることになった。⁽⁴¹⁾

明らかになっていることだが、使節はこれらすべてを訪れることは出来なかった。というのも、一部は修復中だったからである。たとえば、セストロエツキー武器工場、工科学校では十月より前にはどうにも修復が終わらなかった。海軍兵学校も、見学することはとても困難な状況にあった。なぜなら、生徒と大部分の将校とは、ある者は休暇中で、また

ある者たちは海上に出ており、このような場合に臨席していなければならぬ人々が誰もいなかったからであった。加えて、学校の建物はまだ塗装が終わっていない^(xii)。

八月九日、使節団の団員はペトロパヴロフスク要塞とその冠塞、造幣所の見学に招かれた。八月十一日にはブルコヴォ観測所を、十三日には造兵廠と大砲鑄造工場を見学した。次の日、使節はニコライエフスキー工兵学校を訪れ、十六日にはコルピノの工場群を訪ねた。十八日に日本使節団の士官たちは造船部門次長を伴って海軍工廠を訪問した。それ以外に、彼らは林業大学の博物館と附属聾啞学校へ行く希望を示した^(xiii)（八月二十日）。二十四日に彼らは海路を国有汽船に乗りペテルゴフへ赴いた。

次の日、公共図書館を見学した。同日彼らに四つの銀メダルと一つの金メダルが贈られた。これはアレクサンドル二世の戴冠を記念するものだった。八月二十八日に、数名の士官が養育院を訪れた（大学も見学する予定であったが、それを裏付けるような文書史料は無い）。次の朝十時に全権使節らは蒸気船でクロンシュタットへ行った。上に挙げた場所以外に、日本人は、植物園、島々、クラスノエ・セロー、ツァールスコエ・セロー、パヴロフスクに赴いたことは確かである^(xiv)。

九月二日日曜日にツァールスコエ・セローにおいて日本使節団の告別の謁見が行われ、その後、彼らはワルシャワ方面鉄道に乗って帰途に着いた。国境まで宮廷財務長官のシイレメテフが彼らに付き添った。

〔原註〕

- (i) Ф. 473. ОИ. 3. Д. 326. Л. 99.
- (ii) Ф. 472. ОИ. 15. Д. 4. Л. 9-10 об.
- (iii) Ф. 469. ОИ. 2. Д. 635. Л. 10-11.

- (iv) Ф. 473. ОИ. 3. Д. 326. Л. 6-8 об.
- (v) Ф. 473. ОИ. 3. Д. 326. Л. 81 об.
- (vi) その他の文書史料中では、柴田貞太郎は（ロシア語のリストの中では）州の副知事か使節団の主計官の任にあり、あるいは（仏語のリストでは）監察官《procureur》であったとされている。

- (vii) Ф. 469. ОИ. 2. Д. 1129. Л. 6
- (viii) Ф. 469. ОИ. 1. Д. 378. Л. 26-26 об.
- (ix) Там же. Л. 26 об.
- (x) Ф. 469. ОИ. 1. Д. 378. Л. 23-27.
- (xi) Ф. 473. ОИ. 3. Д. 326. Л. 151-151 об.
- (xii) Ф. 473. ОИ. 3. Д. 326. Л. 152-156.
- (xiii) Ф. 473. ОИ. 3. Д. 326. Л. 157-166.
- (xiv) Ф. 477. ОИ. 6. Д. 1202. Л. 11-12.

〔訳註〕

- (1) ロシア国立歴史文書館を示す略号である。
- (2) 「オーデイン」号
- (3) オランダ公使館作成の名簿等に基づいて、宮永孝『文久二年のヨーロッパ報告』（新潮選書、新潮社、一九八九年、一四—一六頁に示された職名は「目付」である。以下同様に補足する。
- (4) 副使
- (5) 組頭
- (6) 調役格通弁御用頭取
- (7) 徒目付
- (8) 調役並
- (9) 同右
- (10) 勘定役
- (11) 勘定格調役
- (12) 小人目付

- (13) 同右
- (14) 同心
- (15) 定役
- (16) 定役元^メ
- (17) 普請役
- (18) 医師
- (19) 医師(佐賀藩医)
- (20) 以下四名は「通詞」。福澤は中津藩士。
- (21) 翻訳方兼医師(津山藩士)
- (22) 同右(薩摩藩士、後の寺島宗則)
- (23) Dvortsovyi zapasnyi dom ^{ドヴォルツォヴィー・ザパズニイ・ドム} は Zapasnyi dvorets と呼ばれていた。山口一夫『福澤諭吉の西航巡歴』福澤諭吉協会、一九八〇年、二七四頁によれば、使節の宿舎は「大理石宮殿」であったというが、同頁に示された松木弘安書翰中の「レセルフェハレースにて」もおそらくは Reserve palais (蘭語) を指しており、「予備宮殿」を表していることが確認^{しきり}でき。
- (24) 一七七〇年にフランス人が建てた旅館。
- (25) ヴラデーミール・ヨシフォヴィチ・ヤマトフ。橋耕斎のこと。
- (26) 一アルシンは約七一cm
- (27) 約一二・三^{トリッ}
- (28) 麵の一種。
- (29) おそらく徳川將軍を指す。以下同様。
- (30) エカテリーナ二世の離宮がある。
- (31) 現在のペトロドゥヴァレット。ピョートル一世の夏の宮殿が設けられた。
- (32) 現エルミタージュ美術館の一部
- (33) 外交に携わっていたゴルチャコフを指す。
- (34) 実際には徳川將軍を指している。
- (35) 「宮永一九八九 六二二」には、同使節団のフランス皇帝への挨拶として「今般某大君の大切な使命を蒙り殿下に拝謁す抑往歲結盟已來兩國の交

- 誼愈篤故今某等をして其親書を贈られ其誠意を表し猶更旧約を固くせしむ偏に殿下の安寧国民之幸福を冀ふ且貴国の軍艦を以使臣等を送迎せらるる段好意満足之至并に謹言」との引用がある。
- (36) ベテルブルクから西南二五キロに位置する。
- (37) 幕府を指すと思われる。
- (38) バレンツ海
- (39) 現サルティコフ・シチェドリン名称図書館
- (40) パヴェル一世の離宮
- (41) 同右

(翻訳：野田 仁)